

熊本国際建築展 くもとアートポリス'96

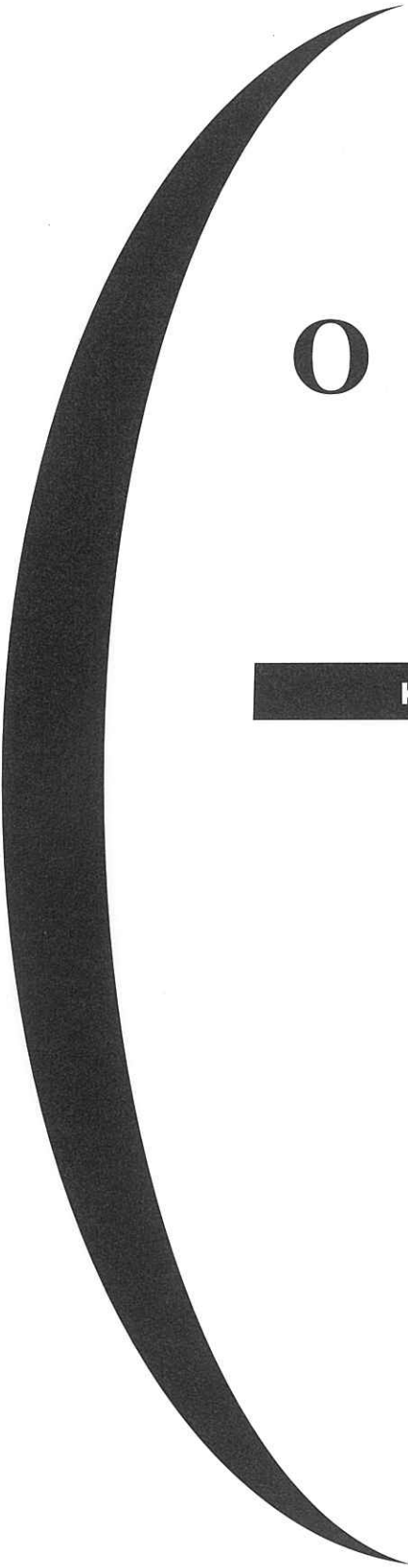
清 和

むらづくり展

SEIWA VILLAGEPLANNING EXHIBITION

KUMAMOTO
INTERNATIONAL
EXHIBITION
OF
ARCHITECTURE
KUMAMOTO
ARTPOLIS '96

K·A·P



O N T E N T S

清和

KUMAMOTO INTERNATIONAL EXHIBITION OF ARCHITECTURE

KUMAMOTO ARTPOLIS '96

清和むらづくり展概要	1
プログラム	2
清和文楽邑軸組模型組立ワークショップ	3
むらづくりフォーラム	7
◆基調講演「私の風景を守り・造る ～未来を拓く全員参加の地域づくり～」	8
講師：木下勇（千葉大学助教授）	
◆スライドレポート	18
◆こども未来フォーラム	26
むらづくり大発表会	35
清和文楽人形芝居観劇会	40
交流会	42

概要

人口4000人足らず、江戸時代から伝承してきた「文楽」ととびきり美しい星空が自慢の素朴な村、清和村。

その村に文楽専用の舞台を持つ「清和文楽館」が出来た。伝統的な木造建築技術を活かしたこの建物は国内外から注目を集め、今や観劇目的はもちろんのこと、建物を見学に来る人も含めると、年間3万人もの来館者を呼ぶ観光資源にまで成長。清和は、建物が人々の生活に根付き、地域を元気にする、アートポリスのお手本と言われている。

今回のむらづくり展では、その文楽館の建設過程を大きな模型を使って再現したり、村の小学生在が文楽や文楽館をテーマにした学習成果を発表。また、村民が清和の良いところや改善したいところなどを書き込んだ大きな地図をつくり上げるなど、様々なイベントを繰り広げた。

村民や村外の人たちがふれあい、村への思いを語りあい、ふるさと文化を再発見する場となった「清和むらづくり展」。農村文化を軸に、ますます元気な村をめざす清和の在り方が改めて確認された。

■ 村づくり大発表会

日時：平成8年8月3日(土)～4日(日) 10:00～17:00

場所：清和村民体育館

内容：◆ガリバーマップ展示

清和のいいところ、改善したいところ、みんなの意見を持ち寄って大きな絵地図を作成

◆清和の歴史・写真展

◆小中学生が描く清和の未来展ーわたしのすきな せいわ いま・そして未来

子供たちのみずみずしい感性で、ふるさとの今を見つめ、未来の清和を表現

◆アートポリスパネル展示

■ 清和文楽邑軸組模型組立ワークショップ

日時：平成8年8月3日(土) 10:00～15:00

場所：清和文楽館

内容：清和文楽館の3分の1の軸組模型を使って、文楽館独自の工法の組立を体験

また夕方からは清和牛バーベキューを囲んで参加者との交流会を実施

P R O G R A M

■ 清和文楽人形芝居観劇会

日程：平成8年8月4日(日) 11:00～12:00

場所：清和文楽館

内容：清和文楽の迫力を生で体験

■ 村づくりフォーラム

日程：平成8年8月4日(日) 13:30～15:30

場所：清和文楽館

内容：◆こども未来フォーラム

清和小の児童が、文楽の里づくりについて楽しく討論

◆スライドリポート

清和村がアートポリスに取り組んだ4年間を振り返り

清和文楽邑の兼瀬哲治支配人が活動を報告

◆講演「私の風景を守り・造る～未来を拓く全員参加の地域づくり～」

講師：木下 勇 千葉大学助教授

Kumamoto Artpolis'96

S
eiwa

清和むらづくり展

清和文楽団 軸組模型組立 ワークショップ

WORK SHOP

SCHEDULE

平成8月3日(土) 10:00~15:00
場所/清和文楽団



古くて新しい工法が、目の前に蘇る!!

8月3日、清和むらづくり展のメインイベントである、

軸組模型組立ワークショップが清和文楽館内の広場で行われた。

これは、清和文楽館の建築に用いられた独特の工法を実際に施工というかたちで知ってもらおうというもの。ほとんどが建築関係という参加者たちは交替で足場に登り、日本の木組の素晴らしさを体感していた。



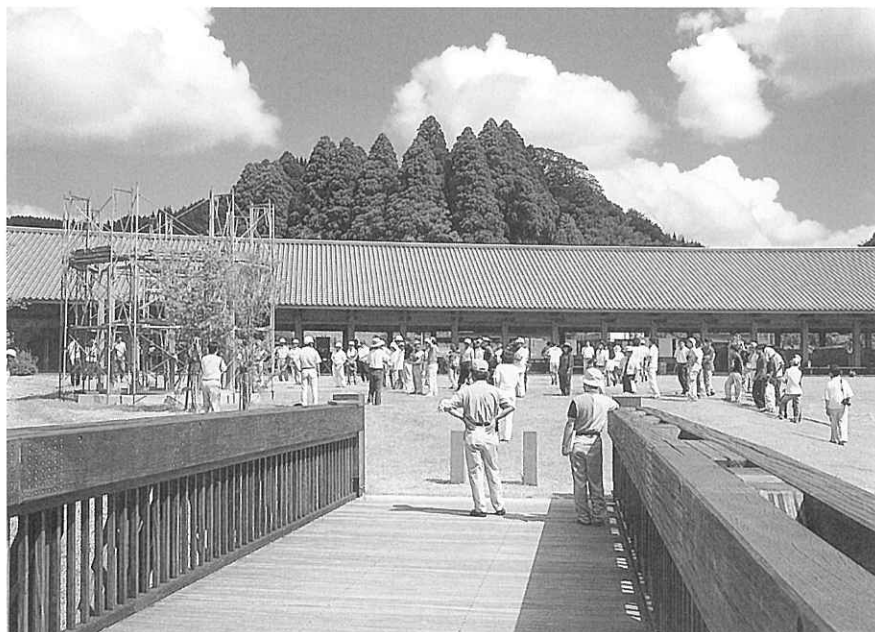
いつか、
こんな仕事をしてみたい!



真夏日の8月。清和文楽館の広場には、高校・専門学校・大学の建築学科の学生、設計事務所に勤務する者など、県内外の建築関係者たちが、木を使った独特の工法を体験でき、また、設計者の石井和絃さんの説明を直接聞けるとあって早々に集まっていた。使用されるこの模型は、施工を請け負った(株)日動工務店が、施工に入る前に3分の1の軸組模型を作つて、墨入れや切り込み、手順などを試作した時のもの。幸い、当時の模型がそのまま保存されていたため、今回の企画が実現した。

清和文楽館は、展示室、客席、舞台の3棟から構成されており、渡り廊下で展示室と客席がつながっている。また、各棟とも太い木材を用いた新型斗拱トウカウと呼ばれる工法で作られており、奈良の東大寺南大門や浄土堂をつくった重源の手法に習い、木と木を重ね組み合わせていく方式が採られている。ワークショップ午前部では、展示棟の屋根部分を構成している“バット工法”が紹介された。バット工法のバットは、野球のバット。例えば、バット3本を互いに掛け合うと、立てることができると同じ仕組み。ちょうどインデียนのテントのように円錐形に立つことになる。そして、バットの数が多いほど、平たく組むことができるというわけだ。作業は、右隣の木材にもたれるように次々に組んでいき、最後に、作業都合上予め立てておいた支柱を外して終わる。清和文楽館の場合は、模型完成後に2つの石を天井から吊してみても、その強度は実証済みだという。広場の隅のコンクリートの土台





にすでに12本の柱が立っている状態でスタンバイ。日動工務店の本多寿さんの説明を聞き、作業をしばらく見学した後、5、6名ずつヘルメットを着け、いよいよ梯子に登り天井の横梁の部分に登っていく。1本2mほどの、切り込みが入った木材を差し込んでボルトで固定していく。

6名の女性参加者の中で真っ先に足場に登った田中奈穂子さんは、YMCA建築科の2年生。今日は一人で参加した。「足場に乘ったのは初めてです。こればかりは本を読んでも分からないでしょ。実際にしてみたらよく分かりました」と興奮した面持ち。

「いつかはこんな仕事（木造建築）をしたいと思っています」と、熊本市内で設計事務所をしている鈴木能成さん。「コンクリートは建てた瞬間から古くなっていくけど、木は建てた後に色が変わり、どんどん良くなるんですよ」と、熊本市内から参加した牛嶋千賀さんはインテリアコーディネーターらしいコメント。建築の現場を知りたいと設計士の友人とともに参加したという。

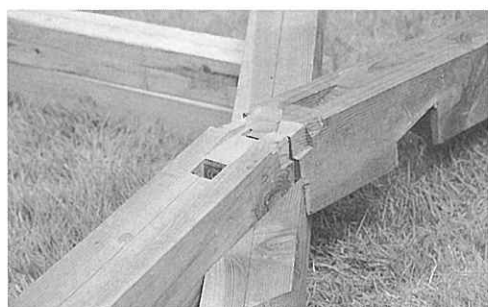
また、矢部町の建設会社からは社長以下7名がヘルメット持参で参加するという熱心さ。「墨付けが難しいんですよ。日動さんはよくやったなあと感じます。今、この近くのゴルフ場に8角形の東屋を建ててるんです。工法はちろん違います、清和文楽館を十

分意識しました」と宮田芳房社長。

後半、東京から駆け付けた石井さんが代わって説明を続けた。参加者たちは炎天下のうだるような暑さでも何のその。専門的な質問が続出し、内容の濃いワークショップとなった。軸組みの完成後、30分間ほど、石井さんが清和文楽館や木造建築に対する思いを語った。

「国立文楽劇場の次は、県立も市立もなくて、ここ清和（村立）文楽館だけですからね。すごいことです。私自身もいい仕事をさせてもらいました。当時、木造建築にはかなりの制限があり、この建築方法は例外で出来た建物だったんです。ところが、ここを建ててからは、規制が緩やかになり、その後、東京の『湯島天神』をはじめ、秋田、香川と木造建築を手掛けさせていだきました。というのも、すべて清和文楽館という前例があったからなのです」また、「建築家は用心棒みたいなもの。完成すると、その土地から居なくなるけど、清和はそこががすごかった。年に3万人もお客さんが来てるというじゃないですか。清和村は、小さな村が頑張っただけのことが出来たということで、全国から注目を集めています。経済発展のためにやろうとするものより、文楽は寿命が長いと思いますよ。これから頑張ってください」と、清和村へエールを送った。

分意識しました」と宮田芳房社長。





日本の大工さんの偉大さを感じた

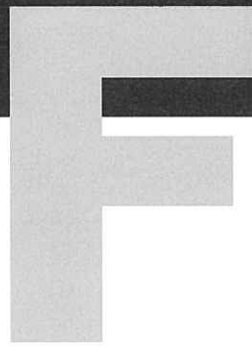
昼食をはさみ午後からは、客席棟の天井部分の「騎馬戦組手工法」に取り組んだ。この工法は日本で初めて清和文楽館で使われ、全国的にも注目を集めた工法だ。今度は、運動会の騎馬戦の時の組み手を思い出してもらおうとよい。2人1組で片手は自分の手首、もう片手は相手の手首を掴む、あのやり方である。あれが四方に広がり重なり合って天井の梁を形成する。バット工法と同じように互いに支え合う仕組みになっている。清和文楽館の天井を見上げると、木目も美しい40cm角の木が重なり合い、

工法がそのまま装飾的な美しさを醸し出している。

ワークショップは広場の奥に掛かっている翁橋のたもとで行われた。この時間からは、福岡県筑紫台高校の建築科1年生97名も夏休み課外授業として見学。うち10名が日動工務店の作業員に加わって体験をした。「日本の大工さんの偉大さを感じた」と汗をぬぐう生徒たち。「生徒たちの大半は、卒業後、建築現場の監督になります。そんな生徒たちにとって、貴重な経験になったと思います」と井上英二教諭。

今回のワークショップは、参加者数も80名（午後はもっと多かったが）、規模こそ小さかったが、参加者たちは皆、積極的に参加していたのが印象に残った。「プラモデルを作ってる時のようにワクワクしました。建築を志す者なら誰でもやってみたいことです」と鈴木さん。参加者たちは貴重な体験に十分満足した様子だった。





むらづくり フォーラム



私の風景を守り・造る
～未来を拓く全員参加の地域づくり～



とき／平成8年8月4日(日)

ところ／清和文楽館

講師／木下勇

(千葉大学助教授／園芸学部、緑地・環境学科・地域計画学研究室)

FORUM

むらづくりフォーラム

◆とき／平成8年8月4日(日)
◆ところ／清和文楽館
◆講師／木下勇(千葉大学助教授／園芸学部、緑地・環境学科・地域計画学研究室)

私の風景を 守り、造る

～未来を拓く全員参加の地域づくり～



自然保全と開発 どこで折り合いをつけるのか

木下でございます。清和村には昨年と2回来ておりまして、いろいろ村の中を案内してもらいました。建築雑誌を見て、非常に神秘的な雰囲気と石井さんの変わった作風が展開して、木を使った軸組みに非常に衝撃を受けました。昨年度、国土庁が地域づくりの新しい施策として“芸術”を取り上げたんですが、その「芸術の薫る里づくり」の企画調査で、「これは清和村しかない」と急に訪ねて話を聞かせていただいたわけです。このように清和村は、建築物が多くの人を集める力があります。先程、兼瀬支配人のお話にもありましたが、建築を見るために結構な人が来ているということでした。建築物で人を集めるというのは、日本の中でも数少ない例だと思います。

そして、この文楽館は人を呼ぶということだけではありません。

今、体育館の方でガリバーマップの展示をしておりますが、そこに子どもたちの絵が展示されています。その絵を描いてる高学年の8割ぐらいは文楽館が描かれています。低学年になると自分の生活周辺の事柄や自然の風景が描かれていますけれど、先程、子どもたちも発表でも文楽館は、清和村の“シンボル”と言ってあります。文楽館はまさに清和村を代表する風景になっております。と云うことは、この建物がもう子どもたちの誇りになっているということでもあります。これは大きな意味を持っていると思います。私が刺激を受けたように、この建物が発する感性、これは石井さんが経験の中で培ってきた感性ですが、それから清和村に立つ場合の在り方、メッセージを子どもたちがきちんと受け止めているということです。

建物の意味するところや不思議な雰囲気は子どもたちの絵の中にも現れています。未来を描くという表題で、文楽館がUFOのように見えたり、タニシにも見えるんです。そんな楽しさも持っているわけです。そして、木を使った建築の技術を思い起こさせるような部分、今、職人の技術というものが問われなくなっている状況の中で、職人さん魂を揺さぶるような新しい仕掛けもあります。昨日、模型軸組の組み立てワークシヨップにたくさんの人が熱心に参加されたのはその表れだと思います。

この建物は古さと新しさと両方持っています。この古さと新しさをどう組み合わせるのか。ある民族学者が、生活のあり方を「古いものを下敷きに新しいものを乗せる」と述べています。この文楽館はその反対で、新しいものに古いものを組み込んだのかもしれない。子どもたちはそういうメッセージを受けとっています。

これから清和村はどう展開していくのか、古いものだけでは、やはり若い人の心を掴むことはできません。子どもたちの絵には高層ビルが林立するような都市を描いているものもあります。中にはパチンコ店が大きく描かれているのも

あります。中学生の絵に多かったようです。中高生くらいになると、古いものはダサイ、新しいものを求める志向が働きます。農村の中での生活の良さを謳っているものの対極にこうした要求もあるわけですね。

そのように自然と開発の調和、開発と保全。単に自然の中にいて素晴らしいだけではだめで、若者たちの心をどうつかむのか課題になってきます。よく言われるけど難しいですね。口で言うのは簡単ですが、頭を使わなければならぬ。開発と保全、これをどう組み合わせるのか。その方法として、子どもに視点を置いた取り組みにおいても、清和村のガリバーマップの絵と似ています。自然の中で培われる感性は、低学年ほど豊かに描かれています。そして、中学生になるほど薄れているような、表現自体もつまらないものになってしまっています。ここに清和村の中学生がいたら、申し訳ないけど、それはただでなく日本全国いたるところでそのような状況なんですね。文楽館からのメッセージを受け止めて描いた絵というのは、感性が豊かな子ほど見事に描いているわけです。みなさん、一人ひとり好きな風景を持ってい

むらづくりフォーラム

るかと思うのです。その感性を大事にしながら、明日の風景づくりに取り組んでいかれてはどうでしょうか。そういうものでもう一度、清和村の風景の在り方を考えてみてはどうでしょうかということです。

再び、絵の話ですが、タイトルに「星が一杯。自然が一杯。そして文楽館」と書かれています。村として大きな取り組みやセールスポイントはきちんと伝わっています。また、文楽館の背景には緑色で描かれた山々が描かれております。いつも遊んでいる川や牛とかが描かれています。天文台と広大な平原が描かれているのもあります。自分たちを含めた風景を描く中で、何が清和村というものを作っているかということを考えてみるのが、地域の独自の風景を守ることになるのではないかと思います。



好きな風景を描くことが 地域を考えるきっかけに

では、私が関わった新潟県小国町の事例を参考に考えていただきたいと思います。小国町というのはどこにでもあり、熊本県の小国町は有名ですね。東北の山形県にも小国町があります。そしてこの小国町も山に隠れるような、周囲を山で囲まれるという同じような地形です。ここは秋になると見事な紅葉を呈します。実は豪雪山村でして、昔40数軒あった集落が、今ではずいぶん空き家も目立っています。

この村は紙の生産で有名なところでありまして、和紙を求めて芸術関係の人が訪れます。そこで空き家を利用して芸術村を作ろうと、少ない予算なので町の人と役場と一緒にになって修復しました。こういった民家を活用した芸術からメッセージを発するというのを始めたわけですね。中のディスプレイ

は、町の職員と大工さんが一緒になってやりました。中には和紙の人形が展示してあります。ここでスイスの切り絵の展示会もしました。農村と都市との交流。それから、スイスの小さな町と姉妹提携を結んで、国際交流を始めました。しかし、思いはこちらばかりが強く、向こうからは全然来てくれません。そこで私や美術関係者がなんとかしようと手を尽しました。切り絵展は私のスイス人の友人が切り絵を集めて持ってきてくれたのです。スイスの切り絵の発祥と言うのは、泊まり歩きながら放浪している人が、一宿一飯のお礼にその土地の風景を切り取ってその家に贈ったものです。

このスイスの切り絵展に触発されて、私はみんなに景観に興味を持ってもらうための仕掛けとして、絵を描いてもらうことにしました。



むらづくりフォーラム

「景観」と言葉で言っても「景観とは金になるのか」と言われてしまいます。少しアプローチをかわして、自分の気持ちを表すために、感情を伴うような風景を切り取る作業をしてもらいました。子どもたちには絵を描いてもらいました。写真の好きな大人の人には写真で俳句、短歌など、趣味の中で自分の好きな風景を描いてもらって展示会をやりました。

子どもたちはやはり体験を通して風景と関わっています。一人の子は自分の住んでいる所から山へ入り込んだところから、自分の集落と向こうの山裾の集落を描いています。そして一緒に作文も添えています。「なぜこの風景が好きか」と言うと、私はムシヤクシヤした時に山に登る。犬を連れて散歩に出る。上から眺めるとスカッとすると」と。独特な構図にも感性が育まれているのがよく分かります。

小学校5年生は、雪の中の木の姿を描いています。寂しい風景のなかに木を描いている。雪は寂しくつらいけど、ぬくもりもある。この木に託す思いがあふれています。風景は見る人によって違い、また心を反映するものであります。こういう表現をする子は非常に素晴らしいと思います。

小学校2年生は、田んぼの稲がそよいでいる風景を描いています。作文は「風が吹いた日」とあります。この子は風が吹いた瞬間を描いているのです。農作業の手伝いに来たのでしょうか。田んぼの周りで風がそよいでいます。私たちは景観の整備、とくに建築家はそういうところに関心がいきがちなんですが、地域の人たち、特に子どもたちはある一瞬の風景が入ってくるという心との関わりがあります。

道祖神が置いてある裏山の風景を描いているのもあります。「僕は森の風景を描きました。そこはお墓やお地蔵さまがある森です。僕はそここの風景がとても好きです。なぜかと言うと、それは僕の思い出の場所だからです。ぼくがよく遊んだところだからです。泣いたり、笑ったりして遊んだ所だからです。そういうことをしていたから、僕の好きな風景だと思う。それと、ちょっと嫌なことがあります。森の木が切られたからです。開発とかで思い出の場所の木を切っていました。でも少しだけ切られただけなので良かったです。僕は、森をこれ以上を切らないでほしいと思います。そこに埋まっている僕たちのご先祖さまのお墓を守っていききたいです。自然を破壊

しないようにしてほしいです」これはバブルの終りのころでありまして、リゾート開発は各地に押し寄せてきました。この小国町もそうです。ゴルフ場開発のために、一部の土地が売られてしまいました。子どもたちはそういうことを書いているわけです。

子どもからお年寄りまで みんなが地域の宝探し

そして、子どもと大人と一緒に発表し合う場面を設けました。この時、有名な写真家の人を呼んだりしてパネルディスカッションを行いました。ある子はリゾート開発には断固反対だというようなことを作文に書き、小国町が芸術村ということで、スイスのきり絵展が小国町で日本で初めて行われたことを誇りに思うということを発表しながら、最後に自然を大事にした町であってほしいと結びました。これは、とても説得力がありました。そして、町の人の心を打ちました。最終的には、バブルがはじけたこともあって、リゾート計画は途絶えてしまったわけですが、「自然を大事にしていこう風景づくり」を町の人や私たちは気がつかされたのです。このような取り組みをしながら、風景に対する啓発というとおこがましいのですが、作文とか絵に教わった次第なんです。

子どもからお年寄りまで、全員参加で地域づくりをしていく必要

があるんじゃないかということで、「小国町みんなが地域の宝発見、いいところ探し」の作業を行っていきました。お年寄り班、女性班、子供班とら、6人ずつ班を作り、自分たちの生活の範囲を歩きました。普段参加しないような高校生たちも参加しました。高校生グループは、村の中を歩きながら、「昔、○○がいてよく遊んだ」とか「ここには大きな○○があった」とか言って盛んに懐かしがっていました。ちょっとした変化に「変わったってしまったら寂しい」というようなことを言っていました。

こういう行事では、特に子どもたちには楽しい要素は欠かせないので、食べ物もふるまいました。村の昔ながらの共同作業の延長でだご汁づくりを行いました。こういう行事がないと、多くの人は集められませんね。（公民館みたいなところで）グループに分かれて、発見した宝ものを地図に書き込みました。どんなものが宝物になって出てきたかと言いますと、「豆

むらづくりフォーラム

腐がおいしい」「清水がある」「藁家（民家）がある」「遊べる所がある」「顔見知りが多い」など。ありきたりのことが多いと言われるれば、そうかもしれません。良い点は青い紙に、悪い点は黄色の紙に書いています。それは「出前がない」「自動販売機がない」などで、便利さ志向が伺えます。こういったことは、開発と保全をつま

く調和させる、本当にこういうものがあつた方がいいのかどうかを、子どもたちも大人たちも考える出発点になります。清水の良さを再発見するとか、清水を使って村づくりをしようとかいうことを、このような全体発表で確認する大事な場面であり、面白い場面です。子どもたちがお父さんたちと対等に意見を言い合うことも大事です。

高校生の子どもたちは、家や周辺の風景がどんどん変わっていくことを非常に寂しいと言いました。変化は激しくない方がいいというようなことを言うわけです。そこにまた、風景と心の関係が見えてきます。中学生は新しいものへのあこがれのような指向があるんですが、高校生になると故郷の子ども時代が懐かしいと思えてくるような世代になるのです。周りの環境が安定しているということが、自分たちに落ち着きを与えるんだと

いうようなことを発表していました。この世代は環境の変化に非常に敏感で、不安定にあります。警視庁の統計にも青少年の非行は郊外の環境の変化の激しいところに多いというデータがありますが、そういうことだと思います。

地域の宝を まちづくりに生かしていく

またこれを機に、子どもと親世代が芝居を復活させました。清和村にも人形浄瑠璃があります、ここ小国町でも昔あったお芝居を復活させまして、一緒に表現活動していくというものを始めました。こういう営みの中で伝統芸能を教わったり、意義を感じたり…。若い世代が中心になって進めました。どちらかと言うと、これまでまちのことに関心のなかった世代が一連の計画の作業を任されたことが、活発に町に関わっていく子どもたちを育てていくということになったのです。

過疎化に伴い廃校になった小学校をどうするかとみんな考えた結果、来町者の宿泊施設にしまし

た。村の人は、小学校が廃校になるとあって意気消沈して、半数の人が村を降りようとしていました。それが、みんなで地域づくりに参加し、みんなで宝物発見しました。そして、婦人グループが工夫あって宿泊施設の賄いをするようになりしました。ガリバーマップのよくな中で、あるおばあちゃんは果実酒がうまいとみんなから評価されました。それで、そのおばあちゃんは元気ついて、ついでに友達のおばあちゃんにも果実酒の作り方を教えて製造を始めました。あるおじいさんは「座もち」がうまい話がうまいということで、遠くから来たお客さんを相手に囲炉裏端で接待をしています。こんなふ



私の風景を 守り・造る

うに地域でみんな宝物を発見したことが、まちづくりの中に生かされています。宿泊施設を中心に周辺の遊歩道を整備して看板に表示するなど、みんなで考えたことに事業がついて、だんだん整備されてきています。廃校になった時は、半数が出て行こうかと思っていたのが、だんだん気持ちが上向いてきて、まちが明るくなってきました。先程の宿泊施設も客が順調に増えています。

新潟の小国町と清和村を比べることはできないんですが、小国町の方が条件は厳しいというのが率直な印象です。清和村は恵まれているかと思います。小国町の場合

は下からの取組み、ボトムアップですが、清和村は、アートを地域に広めていこうとされています。

トップダウンできたものをどういう風に受け止められているか。だれもがアーティストです。そのアートの心を出し合い、評価をし合い風景をつくっていく。こういう展開をしたら本当のアートボリスの清和村になるのではないかと思います。子どもからお年寄りまで、生活の中で思い出の風景だったり、いろいろな思いのある風景だったり。そういう風景を描きながら何を守るべきか、そこに開発と保全との調和の答が見えてくると思います。清和村の在り方があるかと思っています。

僕が小国町でやった取組みが、何かの参考になればと思います。以上で私の話を終わります。

清和村 スライド レポート

**アートポリスの建物に
村の命運を懸けてみよう
「文楽の里づくり」は
切羽詰まった
むらおこしから
出発したのです**

兼瀬 哲治 文楽邑支配人





減反政策、観光という新たな道を模索

私どもは、文楽の里づくりをやってきましたが、それをどういうアートボリスの位置づけでやってきたのかということをご報告申し上げます。

私どもは昭和54年に「文楽の里」と名前を付けました。この時、なぜ「文楽の里」だったのかということですが、実は昭和46年から減反政策が始まりました。この減反政策で農業が曲り角だと言われました。それからずっと曲がり角を曲りつつ、一回りをしましたら、農業の規模は一回り小さくなつてしまいました。そこで、何とかしてこの農業を補う、農業を助ける産業を作らなければならないのではと思いました。その時、思ったのが観光でございました。その当時は、名所旧跡、神社仏閣、風光明媚なところを訪ね歩くというのが「観光」でありました。ですから、私どもはそういうものを一生懸命探しました。村の中にお客様を呼べる資源はないだろうか。ところがなかったわけでございます。通潤橋のように、ただ物があるだけで人がどんどんお出でになるようなものはない。どうしようか、皆で議論をしました。そして、ちょうど54年でございましたが、文楽が県から重要無形文化財に指定されました。その時、「あっ、文楽があるじゃないか。文楽で何とかやろう」と。「文楽の里」と名付けました。けれど、その時、実は文楽が常設劇場で上演できる、このようなたちになってくるとは夢にも思っていませんでした。ただ、私どもが思いましたのは、九州山地のど真ん中にある清和村が目立たなければどうにもならないという思いが大変強





かっただけです。この目立とうということが、“観光”において本当に大事なことだと気付いてきました。目立たなければ、お客様に来ていただけません。知らしめないとお出でいただけないわけです。この催しにしても皆様に良く知っていただいて、こういう風に参加していただいたわけです。とにかく知っていただかないと、どうにもならない。その時の目立とうという精神は本当に大事なものと受け継がれているわけです。

建物があるだけで人を呼べるようなもの

昭和54年から8年経って、文楽館をつくらうという話になります。『「文楽の里」と言うけれど、文楽を見るところはどこにあるのか』という声が出るようになりました。それでは展示棟をつくらうか、ついでに劇場まで造ってしまおうかという風に話がトントン拍子に進んでいきました。この時、私どもは昭和54年に戻りまして、「通潤橋のようなものはないか」と考えたことを思い出したんです。この文楽館を通潤橋のようなものに出来ないだろうか。建物があるだけでお客様を呼べるような、そんな面白い建物にすることができないかという思いが蘇ってきました。ちょうどその時、アートポリス事業があると分かって参加することになりました。「建物があるだけで人を呼べるようなものがほしい」という思いがずっと長く続いていたということも大事なことだろうと思います。

そして、文楽館の建設に入ってしまったわけです。日本でも

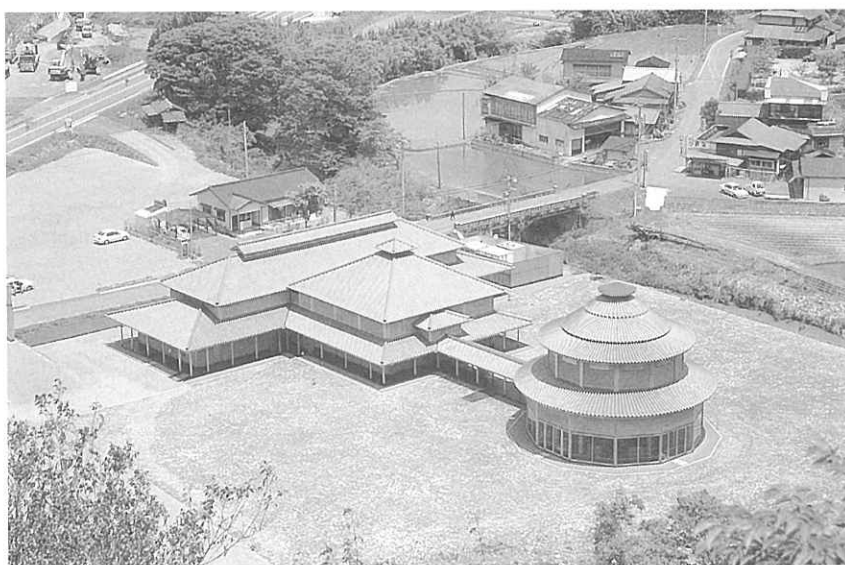
初めてと言われる木組みが提案されてまいりました。せっかく投資をするなら、建物だけでお客様を呼べるような、そういったものを造りたいという思い通り、こうやって建物が出来上がりました。

ところが、まだまだ不安がありました。「文楽で本当にお客様にお出でいただけるだろうか。文楽を見ていただいて果たして楽しんでいただけるだろうか」ということです。大変不安でございました。「ファン」を作ることが「不安」になりました。そこで、こう思ったわけです。「もし、この文楽がだめなら、建物を遺跡として残そう。そのお客様の「お入り」で私たちは生活していこう」と。

そうしましたら素晴らしい木組みが出てまいりました。今、この建物を見るがためにだけ、有名な大学の先生方々がお出でになるということも生じてきております。「建物があただけでお客さまに来ていただける」という私どもの思いは、ここに結実してきたなあと思っています。

180度価値観を変える 石井さんの感性に懸けよう

建てる時にいろいろなことが生じてきました。昨日も、体験していただきましたが、請け負ってくださった建築業者の方は、自費を投資してわざわざ3分の1の模型を作り、どのように墨入れをしたらよいのか、切り込みをしたらよいのか、どのような手順で木組みをしたらよいのか、今まで誰も





やったことのないやり方を自分たちで試験してみられたわけ
です。そして、大きな建物に取り組んでいかれました。

この客席棟も三分の一の模型をつくり、2tの大きな石を
吊し、揺すってみて、これなら大丈夫ということで建てられ
ました。展示棟は100年経った杉の10m直材を、12本使っ
ています。これを製材をする時に大変なことが持ち上がりま
した。銘木市で原木を買って「さあ済んだ」と一安心してい
たら、市場の人が「どうやって製材なさいますか?」と言わ
れるんです。「えっ!」「今の製材所は、6m製材するのが
精一杯。10mを製材する所なんて残っていないよ」というこ
とです。青くなりました。そうしたら、県内を探してよ
うやく1カ所ありました。

文楽館、文楽の里をつくる中で本当に肝を冷やすことが何
度もございました。例えば、若い太夫が入りましたが、それ
以前は浄瑠璃のテープを県立劇場の鈴木館長に送っていただ
いて使っておりました。それで平成4年と5年は公演ができ
たわけですが、もしも、あのテープがなかったなら、開店休
業の状態だったのです。今思えば、冷や汗が出ます。薄氷
を踏むというか、反対に考えれば、運が良かったというか。

その展示棟の中の展示の仕方ですが、この時私た
ちは180度の価値観の転換をしました。石井和紘先生から
360度ガラス張りの中に展示物を入れようという提案があ
りました。周囲の大変素晴らしい緑を取り入れたいというこ
とでした。これまで、展示の在り方というのは真つ暗闇の中
に展示品があり、スポットライトを浴びているというのが普
通でありました。施工を引き受けました業者の方は「全くこ
れまでの常識と違う。周囲の風景が入ってくる、しかも直射
日光も入ってくる、そんなところにどんな風にして展示をす
るのか」と大激論になりました。何日も話し合いました。

そして、私たちは、アートボリスに参加したことの根本を見つめ直してみました。実は、私たちが施主、注文者という立場から、石井さんの、これまでの豊富な経験と知識と感性を積み重ねた設計にもの申し上げて変更させて、果たして私どもの気に入るような建物になった場合、その結果はどうなのでしょう？ 私たちは、その人（石井さん）の感性と知識を十分ここに生かして、2000年も3000年も残る建物を造ろうと考えたわけです。「ここで私どもの意思があまりにも出てはいけません。ここでは引こう。100%石井先生の思いを遂げさせてみよう」と。私どもは門外漢なのだから、彼の感性に懸けようというふうに180度考えを変えました。そしてこういう風な展示棟が出来てまいりました。展示棟が180度違った視点から作られたこと。私たちが発注者という立場を180度変えていったということを申し上げたかったわけです。

なんとか楽しい展示館にしたい。そういう体験コーナーを作ってみました。本物の人形が触れるということ、みなさん、楽しんでいただいているようです。また、カラクリ人形も整えまして、お客様に文楽に面白いところから入っていただく。難しいと思っておられる文楽人形のやさしい、楽しい入り口を作って入っていただこうと思いました。

文楽館の配置についても、180度違った経験をしました。実は、展示棟は道路の方にあるはずだったんです。一番奥に舞台のある文楽館と考えていたんです。その予定だったんです。ところが石井先生は、この舞台棟の前に、展示棟を川沿いにとおっしゃるんです。なぜかと言いますと「自宅を思い出していただくとよく分かりますが、自宅の裏側はジメジメとして、人があまり行かない所です。もしもこの舞台棟を川沿いにもっていったら、その先には誰も行かない所になって



しまう。川沿いを歩いていただけのような空間を、展示棟回りに作っていいということになりました。

それから、文楽邑は道路より1m落ちています。この下がりについても「道路と一緒にしたらどうか。上げたら。」と石井先生に再三申し上げました。ところが先生は「いや、下がっていい。道路と同じ高さになると、グラウンドに文楽館を作ったことになるんだよ」とおっしゃるのです。そして、これは下がることになりました。「人間は下がっている方向に歩いていく。帰りは坂が登っていくから帰りにくい。その方がお客さんがたくさん入っていただいて、いつまでも、居られますよ」という話に「あ、そうですか」といった具合です。私たちの思いとは違うものが出てきましたが、その度ごとに、そういう価値の転換をしてまいりました。

次に物産館ですが、このカーブがなんとも優美でございますが、カーブもちよつと見ますと、お客様に背を向けているように思われます。初めはそういう風に感じたんですね。「どうでしょう。お客様を迎えていないような気がするんですが」その時、石井先生から出た話が「この空間が本当に大事なんだ。入って来られて、やすらぎと大きな心の広がりを持たせるような大きな空間を持つことが大事なんだ。いわゆるひとつのタイムスリップするような空間を持たせなくてはいけない」とおっしゃいました。私たちは、ここでも180度（価値観の）転換を迫られました。そして、こういう景観が出てまいりました。





そして、年間13万人のお客様と 1億5千万円の外貨が

アートボリスに参加して大変良かったことは、東京から情報が発信できたことです。東京から発信される既存のルートに乗った建築雑誌の表紙に取り上げられました。こんな片田舎の小さな村の出来事が「新建築」という専門雑誌の表紙を飾るなんて、夢にだに思っていませんでした。それによって、たくさんの方がおいでになりました。私たちはマスメディアの力強さをひしひしと感じたわけです。

お陰様で、今年7月21日に千回記念公演を迎えました。1月22回から25回、1年に250回ほどに公演をこなしておりますが、お陰様で大変好評をいただいております。1年間にお客様がお見えになる数は物産館まで入れますと約13万人、1億5千万円ほどの外貨が落ちてきています。また、文化の伝承にいたしましても、こうやって若い太夫ができてまいりまして、生で浄瑠璃をお聞かせすることができるようになりました。本当に皆様のご支援の賜物でございます。

村の“宝”探しに始まったむらおこしでしたが、アートボリス事業は、「建物があるだけで、お客様に来ていただけるものをつくる」という、私どもの所期の目標を達成させてくれました。さらに村の最大の“宝”である文楽は見事に息を吹き返すことができました。「文楽や建物がこの先200年も300年も残るように」という次の命題に向かって、また試行錯誤をしながら、時には180度価値観を変えながら、取り組んでいきたいと思っております。

われらブン楽探検たい!! 文楽や文楽館、 清和のいろんなことが分かったよ



（司会）今日はようこそ私たちのふるさと、そして文楽の里にお出でくださいました。私たちは清和小学校5・6年生の文楽探検隊です。これから「こども未来フォーラム」を始めたいと思います。

私たちは一学期、学校でふるさと学習に取り組ましました。その中で文楽や文楽館について、6つの班に分かれて探検をしました。今日はそのことについて発表をしたいと思います。

まず、最初にそれぞれの班の紹介をします。1班は文楽の歴史を調べました。2班は文楽館の役割を調べました。3班と4班は文楽に関わっておられる人々の願いについて調べました。5班と6班は文楽館の不思議な形について調べました。それでは各班の調べたことについて発表してもらいます。

1班から順にお願いします。

清和文楽つて、

150年も前から続いていたんだね！



僕たちは文楽の歴史について調べました。

さて、清和文楽はどのように伝わってきたのでしょうか。それは今の淡路から伝わって来ました。淡路から大分を通って、そして清和村に伝わりました。江戸時代の終り頃、つまり1848年から1853年、約150年前、あの通潤橋づくりと同じころ、清和村の大川や平野に住む6名の農民が、旅の一座から人形を買い求め、遣い方を教わり稽古に励みました。そして村人を楽しませていたのが、清和文楽の始まりと言われてます。明治時代になると、村内や近くの村々の祭りに出掛けてとても喜ばれたそうです。各地の文楽はその後、どんどん減っていききました。なのにどうして清和文楽だけ残ったのでしょうか。清和文楽は熊本県に残っている唯一の人形芝居です。

残った理由として一つ目は、清和は山奥で自然がいっぱいの場所です。その村には文楽以外の楽しみが少なかったため、村人たちの熱意が人形芝居に向けられ、今まで続けられました。2つ目は、人形芝居は春秋の祭りで、神社に奉納されているものでした。この、

祭りは毎年行われていたため、芝居を上演する機会が度々ありました。3つ目は、祭りの度に上演していたため、関心が高まり、人形芝居好きの人が増えました。4つ目は、他の地域では人形芝居だけを仕事としていた人は、芝居がなくなるとともに辞めていきました。清和村では人形を遣っている人が農業など別の仕事を持っていたため続けていくことができました。最後に、他の地域に比べて親から子へ伝えていくという習慣が強く残っていたために、文楽が今まで残りました。

ここで清和文楽の昔を説明します。清和文楽は年に1回、清和での第一の楽しみだったそうです。村の祭りでも上演していたそうです。公演は昔、大川阿蘇神社で行っていたそうです。文楽館ができるまでは集落センターでしていたそうです。そして、皆の願いから、平成4年3月に、清和文楽館は完成しました。文楽館が出来てから、祭りの時以外も文楽が見れるようになりました。これでぼくたちの発表を終わります。

清和が建てた、

日本でここだけの文楽館なんだ！



僕たちの班は文楽館の役割を調べました。僕たちは日本に文楽館と同じような建物がいくつぐらいあるのか、文楽館を建てようと思ったきっかけは何かという疑問を持つていました。調べた結果を紹介します。文楽館を建てた目的を兼瀬館長に聞きました。その結果、文楽館を建てようと思った目的は、文楽は奉納芝居だったけど、だんだんなくなってきた、文楽がなくなってしまうのじゃないかと心配したそうです。きっかけは、昭和62年に清和は「文楽の里」なのに、文楽をどこで見たらいいかというお尋ねがあった、文楽を何時でも見られるようにと建てられました。そこで、ぼくたちは「どうして文楽の里という名前がついたのか」という疑問が出てきました。それでした、文楽館に取材に行つて尋ねてきました。奉納芝居というの

は昔は、お米が大事だったので、神様に「よく米が取れるようにお芝居を披露しますから、豊作にしてください」と願つて始まったのが奉納芝居です。これは奉納芝居が行われていた神社の舞台です。ここではいまでも文楽が奉納されています。

それと「文楽の里」という名前がついたのは、熊本には文楽の里という名前がほかにはないので付けられました。例えば、「文楽の里」というのは、村の人々が昔から文楽を伝えて、文楽が生活に溶け込んでいるのです。僕たちは「文楽の里」を村以外の人にもたくさん知ってもらつてたくさんの人に清和村のいいところを見てもらおうと思います。そうすれば村はもっともつと元気になると思います。2つ目、文楽館のようなところは全国にいくつぐらいあるのかという疑問ですが、詳しくいうと、文楽館と同じような建物は日本にはありません。それに文楽人形をやっているのは大阪と淡路島と清和の3カ所です。しかも大阪と淡路島は国や市やいろいろな町が協力して建てられたものです。だけど、清和の文楽館は清和だけで建てられたものなので、清和の文楽館です。こんなこと初めてだそうです。そして、文楽館はアートポリスの建物です。僕たちは、文楽と文楽館をこれからも大切にしていきたいと思います。これで僕たちの発表を終わります。

文楽館や物産館で

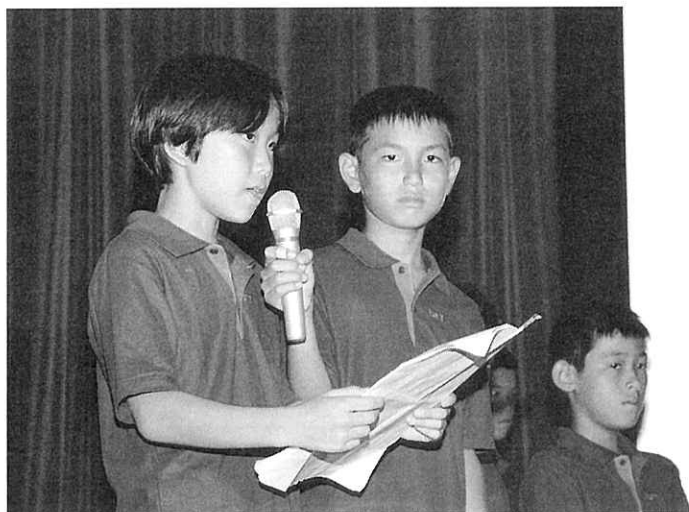
働いている人は本当に清和が好きみたい

私たちは6月14日に文楽の人々の願いを調べるために文楽館に取材に行きました。初めに、物産館という清和の特産や手作りのおもちゃがあるところに行ってみました。そしてそのレジで働いている佐藤さんという人にいろいろなことを聞いてみました。佐藤さんはここで働いて2年と半年も経っているそうです。働くようになってきたきっかけは、おじいさんとおばあさんが文楽の人形を操る仕事をしているからだそうです。働いているときはお客様に喜んでもらえるようにと働いているそうです。これまで働いていてうれしいなと思ったことは、お客さんから「ここにきて良かったね」と言われる時だそうです。それと文楽館には公演をしたり文楽館の管理をしたりする仕事があります。物産館には手作りの食べ物や自然の食べ物などがたくさんあります。その中でもおいしいと思うもの

がたくさんありました。手作り米みそやもち米やソバの粉、自然の水を使った「湧水米」や「星のしずく」などがあります。物産館の人々はこういう清和村の特産物を売っています。お米などは清和の自然の水を使って穫れた米です。1年間苦労して穫れた米なのでとてもおいしいのだなあと思います。物産館で働いている人たちは佐藤さんと同じように清和で穫れたいろいろなものをお客さんに売っています。清和の美味しいお米や野菜などを、たくさんの人に食べてほしいと思っているのだなあと思います。

このように文楽館で働いている人たちは清和村が好きなのだなと思います。そして多くの人たちに文楽館に来てほしいと思います。たくさんの方が私たちの村に来て、清和村のいいところをたくさん見てほしいと思いました。これで私たちの発表を終わります。





[4班]

文楽が好きで、

お客さんに喜んでもらうよう頑張ってる

僕たちは文楽をしている人は、どんな気持ちでやっているのかを調べました。

まず文楽館に取材に行きました。文楽館で三味線を弾いている倉岡さんに聞きました。三味線を弾いていてうれしいことは、自分で納得する演奏ができた時だそうです。倉岡さんは、曲を7から8曲弾けるそうです。苦労しているのは、昔の言葉だから今のお客さんに分かるように伝えることだそうです。今までで嫌だったことは、習っていたところを怒られたりしたことだそうです。倉岡さんは、お客さんにいい音を伝えたいと思って演奏しています。地味な三味線を弾くところで頑張っているんだなあと思いました。倉岡さんは一生懸

命文楽の心をみんなに伝えようとしたんじゃないかと思いました。倉岡さんの本気の願いは、いい曲を伝えて、お客さんが手をたたいてくれるようにすることじゃないかなあと思いました。

次に、僕たちは人形を遣っている人の気持ちを探りました。僕たちの班の平田君のおじいちゃんは、文楽の人形を操っています。平田君がおじいちゃんにいろいろ聞いてくれました。平田君のおじいちゃんは40歳ぐらいから人形を操るのを始めたそうです。人形遣いで一番、苦労することは、人形が本物みたいに見えるように、人形の動きを工夫するところだそうです。一回の公演が終わると汗でびっしょりになるそうです。ステージか

ら下りて、人形を見せたりもするそうです。おじいちゃんのお話を聞くと大変だろうなあと思いました。難しい人形を動かしている平田さんはすごいと思いました。僕たちは文楽をしている人は文楽が好きで見ってくれる人に喜んでもらうために頑張っているんだなあと思いました。これでぼくたちの発表を終わります。

文楽館は、

清和にすむタニシなんだって!?

私たちは文楽館の不思議な形について調べてみました。私たちに展示棟が「タニシ」に見えました。そこで私たちは、文楽館に探検に行き、疑問に思ったことを質問したり調べたりしました。今から調べたことを発表します。そこで上演される文楽は熊本県に唯一つのものです。全国でも珍しいのです。この建物を造るために使われた大きい木は、外国から輸入し、それ以外に使われた木は県内でとった木を利用しています。この写真は展示棟という名前で、私たちが保育園（児）の時に出来しました。ここの展示棟の木にはその時、自分の名前を書いたのを覚えていません。

方だそうです。この写真はここの場所の天井です。文楽人形芝居をしています。この上の天井を見てください。この工法は騎馬戦組手工法という工法を使って建てています。木と木が支え合って落ちないようになっています。最初見た時に、木が落ちてくるんじゃないかなあと思いました。探検の後、私たちは、文楽館を設計した石井先生に文楽館の不思議に思ったことを手紙で尋ねてみることにしました。

は清和の川に住むタニシなのだそうです。川が渦を巻いて天と地を結んでいる、巨大なタニシなのだそうです。文楽館の前の川や田んぼにいくつかと座っているタニシが文楽館なのだそうです。そして石井先生は、文楽館がむらぶくりの中心になってほしいと思っているそうです。石井先生の手紙はとっても楽しい手紙でした。私たちはこれから文楽館を「文楽タニシ」と呼ぼうと思います。これで私たちの発表を終わります。

お訪ねしたことは、どうして清和村にタニシのような建物を建てたのかということと、どうして文楽館のような建物を考えられたのかということでした。そして、石井先生から手紙をもらいました。石井先生の手紙によると、展示棟



文楽館は、

建てる人のすごい努力でできているんだよ

僕たちの班は、文楽館がどうやって建てられたのかを調べてみました。僕たちは6月22日、文楽館を建てた人に会いに行きました。その時、文楽館をつくる時になった気持ちや造った時一番、難しかったところなどを聞きました。最初、文楽館を造ることになった時はとても心配だったそうです。そこで造る前に模型を造ってできるかどうか調べたそうです。造り始めると、とても大きな木材を使うためにそれを刻んだり、削ったり加工するのが大変苦労したそうです。ほかにいろいろな教わりました。木材を使って建てられる建物では一番大きい建物だそうです。バット工法、割り箸工法、騎馬戦組手工法などを使って文楽館を建てたそうです。

バット工法の紹介をします。バット工法とは、文楽館の資料館の天井のうずを巻いたものです。木材が一つ一つ重なり合って、ずいぶん苦労があつて大変でした。吉

田さんにも聞いた時、「ここが一番大変だった」と言っていました。本当にすごい組み立てです。ここには僕たちが小学2年生の時、書いた名前が書かれています。建てる時は本番で間違ったりしないように、ちゃんとそれぞれの縮尺模型を造りました。模型をつくったお陰で、難しいところや、力の集中してかかるところなど、また、造る時の順番などがよく分かったそうです。その結果、本番では一本も間違えなく建てるのが出来たそうです。どの棟も切り込みの期間が短くて大変です。きれいに早く作らないといけないので、文楽館を建てた人はとても苦労して建てたのがよく分かりました。今までにない不思議な形の文楽館は、吉田さんたちのすごい努力で出来たんだなあと思いました。この建物はアートボリスの建物だそうです。清和村の自慢の建物だと思います。これで僕たちの発表を終わります。





(司会) これで全部の班の発表が終了しました。みんなそれぞれインタビューをしたり手紙を書いたり、調べていました。ここで、ふるさと学習を振り返って、もう少し、私たちの村について考えてみたいと思います。ふるさと学習の感想を発表してもらいます。5年生の松田くん、お願いします。

(松田) 僕は文楽探検隊で清和文楽の歴史を調べました。今までは歴史のことなど考えてもみなかったのに、歴史を調べてみると、すごいことを知ったり、清和村の努力や気持ちも分かってくるような気がしました。

清和文楽は淡路島から九州の大部分、そしてついにこの清和村に伝わってきました。それが約150年も前に。それから親から子へと伝わって、現在も文楽が上演されています。よく今まで伝わってきたなあと思いました。150年間文楽が止まらないで伝わってきたのは、清和村の人々が本当に文楽を誇りに思っていたからだろうなあと思いました。平成4年に文楽館が建ったのですが、文楽館が建ったのも清和村の人々の文楽に対する気持ちが文楽館を建てたのだと思います。このまま文楽が残ってほしいです。これで感想の発表を終わります。

(司会) 次に、6年生の枝尾君お願いします。

(枝尾) 僕たちは文楽館の建物について調べてみました。文楽館はいろいろな組み立て工法が使って

あります。天井の木組みは木と木をはめこんでいて、20tの重さにも耐えるほど頑丈に造られていると聞いて、すごいなあと思いました。設計をした石井さんからの手紙には、文楽館の展示棟は清和の川や田んぼに住むタニシの形と一緒に書いてありました。石井さんは清和の自然をよく見て考えたんだなあと思いました。この文楽館は木でできた建物では大きな建物だそうです。僕はこの「文楽タニシ」を大事にしていきたいと思います。

(司会) 次に6年の高木君お願いします。

(高木) 僕は文楽に関わる人々の願いをテーマに学習しました。僕が一番に残ったことは、物産館で働いている人は、お客さんに喜んでもらえるために一生懸命仕事をしていることです。喜んでもらえることで励まされたり、この仕事をいつまでもやってみたい気持ちになるんだなと思いました。村の人たちが文楽館や文楽邑で働くのは、清和村のいいところを皆に知ってもらうために働いていることを始めて知りました。文楽館で働いている人たちは、僕たちのふるさとをとっても好きなのだなあと思いました。

(司会) それでは、これからの私たちの村の将来について考えてみたいと思います。

6年生の松田君、発表をお願いします。

(松田) 僕は清和文楽はこのまま

残ると思います。それは文楽の好きな人が多くいるからです。それに倉岡さんは浄瑠璃ができて文楽人形を動かしている人はこのまま続けてくれると思うからです。上演される日は、毎日たくさんの方が見に来ています。文楽人形を動かす人は毎日気合い十分です。見に来てくれる人のために文楽館で練習をしています。僕たちの村はいつまでも文楽が好きで、上演している人がいる元気いっぱい村になると思います。

（司会）私たちの村が今から先も元気で楽しい村になってほしいと思います。文楽探検の時、文楽館の館長さんが「元気な村になるために文楽館を建てました」というお話をしていただきました。元気な村になるために、これからどうすればいいと思いますか。6年生の平川さん、発表をお願いします。

（平川）私は今作っている「ふるさと新聞」をたくさんの人に読んでもらって、もっとたくさんの人に文楽を知ってもらいたいんです。そうすれば文楽館の楽しさや文楽館のすごい建物に興味を持った人が、清和村に来られると思います。たくさんの方が文楽を見てくれたら、もっといい清和村になると思います。物産館でもたくさん清和のお米や野菜やおみやげが売ってあります。お客さんがもっといっぱい来れば、そういうった物もたくさん売れると思います。私はたくさんの人に清和に来てもらって、清和のいいところを見てほしいと思います。そうすればわたし

したちの村はもっともって元気になると思います。

（司会）以上で、感想の発表を終わります。最後におじいちゃんが文楽人形を遣っておられる5年生の平田君に、おじいちゃんのことについて作文を発表してもらいます。

（平田）僕のおじいちゃんは文楽の人形を操っています。僕は、小さい時からよく文楽をしているおじいちゃんを見してきました。おじいちゃんは40歳ぐらいからお人形を始めました。うまく動かせるまで10年くらいかかったそうです。今では人形が生きているみたいに動かせます。文楽で一回の公演が終って帰ってくるおじいちゃんの顔は汗でくちやくちやで、僕はおじいちゃんの顔を拭いてあげます。人形をしているおじいちゃんはとてもカッコイイです。これからおじいちゃんにがんばってほしいです。僕たちの村に文楽があるのが僕はとてもうれしいです。僕も早く大きくなっておじいちゃんと一緒に人形を遣ってみたいと思います。

（司会）私は今度のふるさと学習を通して、もっともって文楽のことをよく知って文楽のことを好きにならなくちゃいけないなあとあります。そうしたら、文楽を伝えていきたいなあと思いますが、もしないからです。そんな人が増えたら、村も元気になると思いました。2学期からもふるさと学習を頑張っていきたいと思っています。これで「こども未来フォーラム」を終わります。

*清和小学校は、6学級、全校生徒数75人の小学校。

年一回、全校で文楽観賞の時間を設けるなど、ふるさと学習への取組みが積極的に進められている。

Kumamoto Artpolis'96

S
eiwa

清和むらづくり展

清和村 むらづくり 大発表会

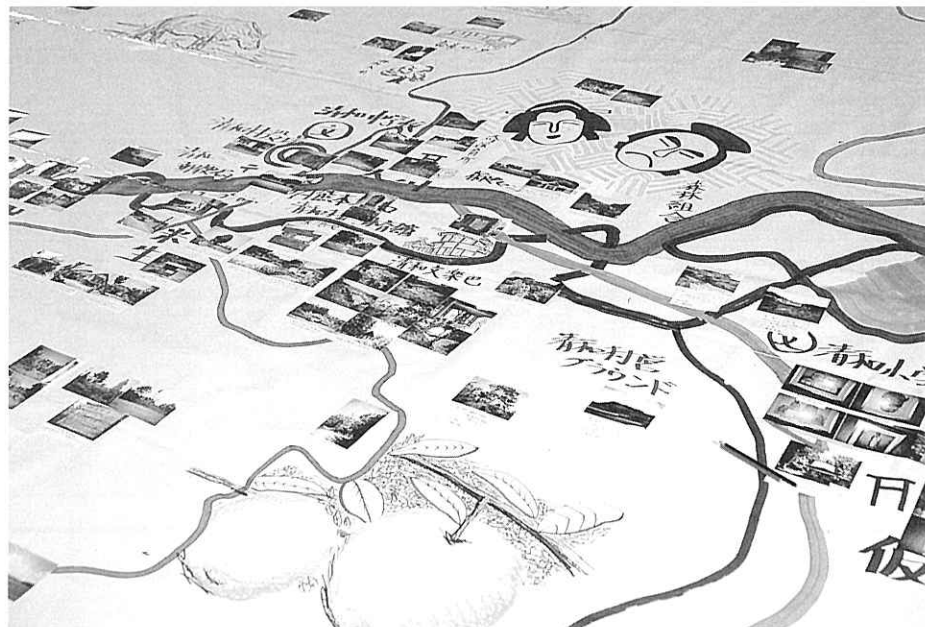
ANNOUNCEMENT

SCHEDULE

平成8年8月3日(土)・4日(日)
場所/清和村民体育館

- ガリバーマップ展示
- 清和の歴史・写真展
- 小中学生が描く清和の未来展
「わたしのすきな せいわ いま・そして未来」
- アートポリスパネル展示





**みんなが考えた
清和の好きなところ
こうなったらいいな
未来の清和**



Kumamoto Artpolis'96

S
づくり展
eiwa

清和むらづくり展

ガリバーになって、村を散策してみる。

タテ15mヨコ8m、体育館いっぱいには広げられた白い紙に描かれた清和村の地図。高原や河川、道路、公民館、集落が描き込んである。ガリバーマップは、役場の職員たちが徹夜をして2日間がかりで制作したものだ。余白の文楽人形や牛、栗など、清和村のイメージしたイラストは、熊本大学建築学科の学生たちが駆け付けて描いてくれたという。

マップの上を歩くとまさにガリバーになった気分だ。「そうそう、うちはこの辺よね」と小学生。「自分の家が見つかったら、地図に名前を書き込んでごらん」とスタッフ

フ。マップの上を歩きながら、自分の家や友達の家を探す親子連れの姿が見られた。

木立ちの中にたたずむ御堂や緑豊かな山なみ、大きな菩提樹……。マップの所々にある短いコメントを添えた写真は、区長や組長たちが、村民から「村の好きな所」を聞き取って写真におさめたもの。何の変哲もない小学校の写真だが、「とても懐かしい場所です」というコメント。村民のふるさとへの想いがほのぼのと伝わってくる。

ほかに「嫌いな所」「改善した方がいい所」もある。「嫌いな所」は、汚れた川や廃屋など。

「改善した方がいい所」は、曲がりくねって危ない道や、畑の中の廃車などが挙げられている。「廃車を農作業の休憩用に使っているけど、景観がよいくないと思う」いう自戒の弁も。「井無田高原の財産、宝」と称して、桜、つり橋、マウンテンバイク、バードウォッチングなど、遊び方を楽しみ方を知らせる地図もあった。

心の目で見た風景、景観美という視点で見た風景、機能性で見た風景……。村民たちが、いろんな視点から村を眺め考える手掛かりとなったようだ。





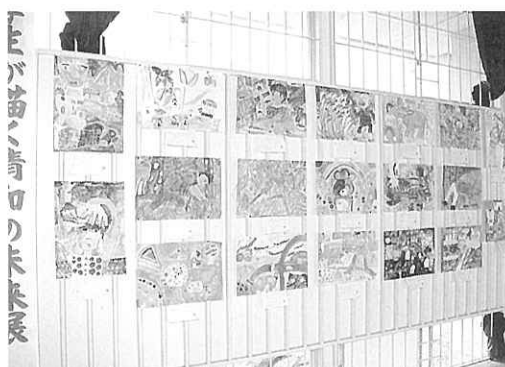
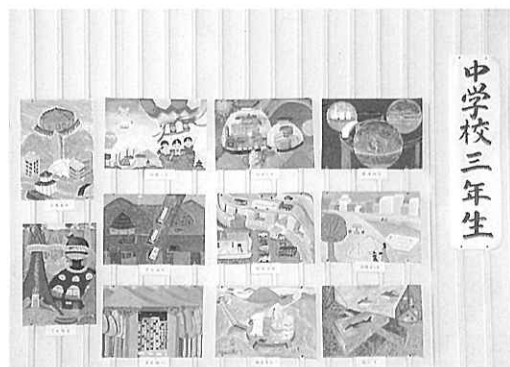
清和

文

楽

館

は カ ッ コ イ イ



「清和村で一番好きなのは清和文楽館。カッコイイ。僕のじいちゃんは、清和文楽の人形をしようと。清和文楽もカッコイイ。僕も15才になったら、文楽を習ってよかと約束してある」と、清和小学校5年生の平田和典くん。その顔はキラキラと自信に満ち溢れている。

体育館の壁面には、「小中学生が描く清和の未来展」わたしのすきなせいわ いまそして未来」と題して、清和村内の小・中学生たちの絵画150点ほどが展示された。好きなどころとして、約8割の子どもたちが清和文楽館を描いているのが印象的だ。次いで「自然がたくさんあるところ」、「みどりが多いところ」。

「中学生が見た清和村」コーナーでは、「もともと清和村らしいところ」を考えたという写真が展示してある。昭和初期の小峰地区集落の風景や、廃校になった3つの小学校の写真などが、お年よりたちを立ち止まらせていた。

小・中学生、全生徒合わせても400人足らずの清和村。子どもたちみんなが、このまちづくり展に参加しているのが分かる、温かな雰囲気を感じるイベントとなった。





清和文楽人形 芝居観劇会

●とき●
平成8年8月4日(日)

●ところ●
清和文楽館

●外題●
「壺坂霊験記～山の段～」

ベンベン、ベンベン……
浄瑠璃(語り)に合わせて、人形がまるで生きているかのように泣く、笑う、喜ぶ。三味線の音は場面を否応なく盛り上げる。
江戸時代、嘉永年間(約150年前)に清和村に人形芝居の一座が訪れたおり、浄瑠璃の好きな村人が人形を買い求め、人形遣いの技術を習ったのが清和文楽の原型を作ったとされている。文楽は山里での数少ない娯楽の一つとして、あるいは近隣の村々の奉納の行事として守り継がれてきた。ひところは、人形芝居をする座は九州内にいくつもあったと言われるが、農家が自ら奉納芝居をしていたのは、清和村だけだったという。

文楽がむらづくりの核に

浄瑠璃の音が、 三味線の音が山里に響く

その後、明治末から大正にかけて一時衰退したが、昭和2年に復興。昭和29年に清和文楽保存会が結成された。同村では昭和54年に熊本県重要無形文化財の指定を受けたのをきっかけに、文楽を中心とした「文楽の里」づくりを進めてきた。

平成4年に県のアートポリス事業に参加。文楽専用の舞台を持つ「清和文楽館」が完成した。これと同時に倉岡寿典さんが、文楽館の職員に採用され、文楽の本場である淡路島に修行に出掛けるなど、清和文楽の復興の基盤づくりが始まった。





後継者育成も順調に、 若手2人が太夫として活躍

平成6年には、倉岡さんが2年間の修行を終えて帰郷。30年ぶりに浄瑠璃と三味線がそろった、本格的な清和文楽人形芝居（それまではテープを使用していた）が復活した。また、平成8年には、佐賀県から山崎純子さんが太夫として清和村に移り住み、舞台に立っている。

現在、保存会のメンバーは、最年長82才を頭に男性11名、女性5名の計16名。農業、サラリーマンなど仕事のかたわら年に約250回の公演をこなしている。また、文楽館の若い職員たちも仕事が終わってから自主的に人形遣いの練習をするなど、次の世代も確実に育ちつつある。「昔は、神社や体育館でよそから借り物の照明を使っていた。専用の舞台ができた時はうれしかったですね。こんなハイカラなところで演じられるなんて鼻が高かです」と保存会会長の佐藤文夫さん。



百五十年の伝統芸能に触れる



この日の外題は、お里、沢市で有名な「壺坂霊験記」の山の間。鶴澤友寿太夫と（倉岡寿典さん）鶴澤友理江太夫（山崎純子さん）が語りの妙味を披露した。続いて、舞台背景が次々に早変わりする「千畳座敷十六景」の、あでやかな舞台に、観劇者たちはすっかり魅了された様子だった。

また、公演終了後、人形の遣い手が舞台から降りてきて、観劇者に人形の遣い方を披露した。「頭と右手を同時に動かすのって難しいですね」建築士の息子に勧められて来たという中年の婦人たちは、めったに出来ない体験に満足した様子だった。

清和牛とビールを片手に、建築を語ろう むらを語ろう

「清和村交流会」

●とき／平成8年8月3日(土)
●ところ／清和文楽邑

模型組立ワークショップが終了した8月3日。午後4時から、清和文楽邑、物産館前の芝生広場で交流会が行われた。雨が降ったり止んだり、朝からぐずつき気味の天気が続いたが、交流会が始まるころには雨も止み、ビニールシートを広げての宴となった。

清和牛、人参、ピーマン、しいたけ、にんじん、キャベツ、米など、バーベキューの材料はすべて清和村の特産物ばかり。用意したおにぎりはざつと1000人分。参加者は食べ放題、飲み放題のもてなしを存分に楽しんだ。

宴には、清和文楽館・物産館を設計した石井和紘さんも参加。石井さんは、アートポリス事業が終了した後も、度々清和村を訪れ村民との交流を続けているだけあって、初めから打ち解けた様子。ワークショップの参加者、村民たちが入り交じっての話に花が咲いた。「学生さんとか、久しぶりに若っか人たちと飲みました。文楽館、展示棟も物産館も、建築界の中では高く評価してもらっているそうです。よその人から、若い人から聞くと、『ほー、そんなもんかなあ』と改めて見直しました」と大川区長の武原豊記さん。

宴は約2時間で“お開き”となったが、若い人たちはそのまま居残り、夜遅くまで賑わった。





くまもとアートポリス'96

清和むらづくり展

KUMAMOTO ARTPOLIS'96 SEIWA VILLAGEPLANNING EXHIBITION

1997年3月発行

編集・発行 熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」実行委員会
事務局：熊本県土木部建築課内
〒862-70 熊本市水前寺6丁目18-1 TEL 383-1111

企画・制作 株式会社熊日広告社、有限会社エアーズ
デザイン 株式会社フォリオ

印 刷 凸版印刷株式会社

- 総合記録
- 都市デザインサミット
- 熊本まちづくり展
- 山鹿まちづくり展
- 阿蘇まちづくり展
- 清和むらづくり展
- 泉むらづくり展

KUMAMOTO ARTPOLIS '96